

早稲田大学審査学位論文

博士（スポーツ科学）

概要書

**明治期から現代に至る競技としての剣道の形成過程の研究**

**—型の術理と競技スポーツ性との対抗関係をめぐって—**

**A historical study of the developmental process of kendo**

**competition from the Meiji era to the present day**

**—Focusing on the conflict relation between**

**techniques and thought in the kata, and competitive sport**

**aspects, of kendo—**

2020年1月

早稲田大学大学院 スポーツ科学研究科

佐藤 皓也

SATO, Koya

研究指導教員： 志々田 文明 教授

## はじめに

日本剣道の技術性に関する歴史研究では「競技スポーツ性」と「型の術理」をめぐる研究がなされてきた。前者では、試合で勝利志向の強い剣道観及びそれに付随する竹刀操作の技術及び剣道の審判規定や試合方法に対する工夫が論じられ、後者では、日本刀の操作法に裏打ちされた剣道観や技術性が論じられてきた。しかしこれら相互の関係については、これまで本格的な研究がなされてこなかった。こうした認識を踏まえて本研究は、先行研究の議論を総合的に検討した場合に、現在及び将来の剣道にどのような影響を及ぼすことができるのかという問いを立て、以下のように問題設定をした。

観点 1：戦前における学生剣道界の剣道に対する取り組みの実態はどうであったか。

(第 1 章)

観点 2：剣道競技の目的である有効打突の思想はどのように変遷してきたか。

(第 2 章及び第 3 章)

観点 3：剣道において勝利至上主義的な剣道と批判されてきた＜あてっこ剣道＞と全日本剣道連盟制定の“剣道の理念”にそった＜剣理剣道＞とはどのように対抗してきたか。(第 4 章) 以上の観点から本研究の目的は、明治期から現代に至る競技としての剣道の形成過程を探究することを通して、剣道における競技スポーツ性と型の術理の対抗関係を解明することにある。

## 第一章

江戸期における竹刀打ち込み稽古の登場と発展について、ルールや審判の出現を指標にして歴史的に検討した。その結果、以下の知見が得られた。①幕末に競技としての剣道の萌芽がみられること。②現代における“あてっこ”という剣道技術の出現は竹刀打ち込み稽古を開始してから約 100 年後の 1820 年代であること。③勝敗を示す“一本”という言葉の使用は 1840 年代であること。④明治時代以降の旧制高校剣道部にみられる“引き揚げ”や“片手技”は幕末からみられる現象であること。以上から、江戸中期から後期は型の術理（日本刀に操作法）を基本としながらも、結果的に競技スポーツ性（竹刀独自の技術）の萌芽がみられた時期である。次に、明治期以降の旧制高校剣道部の学生たちが競技剣道の発展に与えた影響について検討し、以下の知見を得た。明治期から大正期にかけて旧制高校は武士的精神（公正、廉恥、勇猛、剛健などを含む）、道具、審判制度、技術の工夫によって公明正大な勝利を追求した。このことが学生剣道の理念形成に一定の貢献を果たした。当該時期の旧制高校における公明正大な勝利の追求は、竹刀操作と刀剣の観念との乖離を生み出しながら、結果的に近代スポーツに類似した競技文化を作り上げていった。明治維新から昭和天覧試合（1929）までは、学生による公明正大な勝利の追求によって競技スポーツ性が次第に台頭し、型の術理が薄れていく時期である。

## 第二章

競技剣道を成立させるルールにおいて、戦前における有効打突に着目してその誕生と思想について明らかにした。①1927 年に武徳会によって制定された有効打突の規定は、真剣操作に密接に繋がるものとなる観点が重視された。②有効打突の三要素とその説明は明治時代における剣道家の文献によってすでに示されていた 1937 年、国民に戦時意識を徹底させる“国民精神総動員運動実施要綱”が定められた。そのため剣道は、“実戦即応”の技術習得が求められた。その一環として、武徳会は試合を三本勝負から一本勝負に改め、1941 年

からは日本刀の操作法に適った“斬突”を試合で重視した。こうしたなかで剣道において主流となっていた竹刀操作の実戦性が一部で酷評され、日本刀の操作法に対する関心が高まっていった。以上から戦争が続いた1930年から日本の敗戦（1945）までは、剣道の型の術理が実戦性の観点から見直されると共に、競技スポーツ性が薄れていく時期である。

### 第三章

競技剣道を成立させるルールにおいて、戦後の有効打突に着目してその誕生と思想について明らかにした。敗戦後における剣道実施の禁止のなかで撓競技による打突のポイント化の傾向が生じた。その後、GHQによる思想統制によって、剣道は“日本刀（剣）の観念”を払拭した“体育・スポーツ”として再生し、1952年、全日本剣道連盟が設立された。こうしたなかで有効打突は戦前と同様の要素で復活した。当該時期の有効打突は刃筋にみられる型の術理よりも競技スポーツ性が強調された。その後、国民体育大会への参加も公認され“打突による竹刀剣道”として復活した。しかし、これはやがて姿勢を崩してまでも勝敗にこだわる“当てる技術”（当打）を助長するに至った。当てる技術の助長は、敗戦から1991年まで型の術理を示す日本剣道形が学校教育から下火となったことも影響した。このことを憂いた戦前・戦後を体験している剣道指導者たちは、1975年に“剣道の理念”と“剣道修行の心構え”を制定し、剣道修行に励んだ先人の精神性の継承を願った。以上、日本の敗戦（1945）から剣道の理念制定（1975）までは、戦前に比べて剣道の競技スポーツ性が一気に高まり、それに伴って型の術理は一気に希薄化する時期である。

### 第四章

剣理剣道は日本剣道形をベースにし、機能美と結びついた品格と姿勢を乱さず即、攻防に移れるような無理・無駄のない動きで行われる。あてっこ剣道は日本剣道形をベースとせず、あくまで競技における積極的で多様な打つ・突く・かわすというスポーツ的技術の次元で行われる。あてっこ剣道が根強く残存する要因には①競技規則上は違背性がない、②現代剣道に内在する積極的（ダイナミック）な動作を持つ、③規則内において技の多様性を持つことが挙げられる。これに加えて戦後の剣道復活の過程にみられた打突のポイント化の傾向が影響している。剣道研究者らの議論を用いればあてっこ剣道が減少する可能性はあるが、あてっこ剣道は現状では衰えておらず、現代剣道という枠の中で剣理剣道と対抗し、批判にさらされながら今後も存続するであろう。以上から、“剣道の理念”制定後は、それまでの競技スポーツ性を保持しながら次第に型の術理の重要性が再認識されていく時期である。このように、競技スポーツ性と型の術理は競技としての剣道の形成過程のなかで対抗しながら今日まで併存してきたのである。

### おわりに

江戸時代に形稽古を補完するために竹刀打ち込み稽古が始まった。竹刀打ち込み稽古があてっこ剣道を生み出すという剣道史の定説は、あてっこ剣道には剣術の目的である“斬る”が“あてる”に変質したことを示している。この変質が剣術に技術的汎用性をもたらし、誰にでも行うことの出来る大衆的な文化となる一方、大日本帝国剣道形（日本剣道形）による伝統的な文化性の維持として、それぞれ今日に至ったといえる。そうした歴史的背景が今日のあてっこ剣道と“剣の理法”を追求する剣道の併存をもたらしたといえる。将来の剣道の発展を考えると、重要な問題の一つは剣道における試合、昇段審査、稽古の関係を追求することのなかにある。